

## リセ・サンジャックのこどもたち

和田 明子

いまから20年も前の1969年6月、文部省の在外研究費を交付された私は、東京都立大学からベルギー・リエージュ大学地理学教室に留学した。当時のベルギーは、かつての植民地コンゴ（現・ザイール）との関係がたたれていたため、それに代ってリエージュ大への海外からの留学生は、ベトナム和平交渉の影響でパリーに住みにくくなったベトナムのブルジョワ層の子弟が多かった。

出発前に手紙で宿舍の依頼をしておいたのにもかかわらず、大学助手という身分がわざわざいして、到着3ヶ月目で私は、リエージュ市内の学生寮を追いだされた。この次第を知った地理教室のD教授は、フォルクスワーゲンに私をのせて街の肉屋や小間物屋など、心あたりに私の下宿をたのんだ。しかし、アジアからの、女性研究者に提供される部屋は、シャワーもない屋根裏部屋ばかり。日本では公団の3DKに1人ゆうゆう住まっていた者にとって、「ボエーム」の芝居のような屋根裏に、1年間住みこむ勇氣はとでもなかった。エンジンの音ばかりがむなしく響く、リエージュの部屋探してであった。「女房のLyceeに部屋が空いているそうだ。学園長にたのんであげよう」と住まいに困りはてていた私を救済してくれたのは、クリスチャン夫妻であった。（ベルギーではLyceeは女子の中学校、男子のそれはathénéeという）

リセ・サンジャックに用意された私の部屋は、中高校生のパンションになっている5階のエレベーター脇の三角部屋であった。地階は小学校の宿舍、この5階と地下のあいだに教室、会議室、礼拝堂、食堂などがあった。

家庭科の先生、マドモワゼル・ケーリスは、なにくれとない心くばりて私をみまもり、こどもたちと食事をともにするよう手配してくれた。その結果、朝と昼食は小学生といっしょ、夕食は中高校生といっしょに4人1テーブルを囲むことになった。食卓には冷えた軽いビール（リエージュの地酒：ビエ・ド・ブーフ）がおかれて、こどもたちは主食と交互に、ビールをガッポ、ガッポと飲むさまに、水よりビールが安いとはいえ、まずは仰天させられた。

こうして朝から晩までこどもたちと過すうち、へたな私のフランス語も1日1日と用足しができるようになり、こどもたちも1歩1歩と私に近づいてきた。ときにリエージュの街中で彼女たちにあうと、遠くから“Akiko!” “Akiko!” とさけんで、豆だまのように駆けよってくるやいなや「ベッタン」とハンコで押すようなキスを私のほおにするまでになった。

そんなある日、東洋からきたまか不思議な日本人、先生なのか学生なのか、そして“とし”はいったいくつ?好奇心のかたまりのこどもたちは、食事のあとさっと私をとりまき、おぞおぞと尋ねはじめた。“ケラージュ アチュ?” ああ、ついにやってきたナ!“あんた いくつ”ときたのかと私。“Vingtaine” ‘non’ “vingt-deux” ‘non’ “vingt-cinq” ‘non’ 大きな声でいっせいに“ケラージュアチュ?” “dix-huit” ‘non’ “dix-neuf” ‘non’ アー、アー、“セブレ”(本当のこといってるの) ‘oui’。

やがて、こどもの1人いわく“わたしわかったワ、ジャポネ homme Sauvage, オン ナン コントバ” えッ、なんだって、日本人は文明人ではないから“とし”が数えられないって。いよいよヨーロッパのこどもの本音がでたと私。‘私(38才)が本当のとしを答えたら、みんな驚いて卒倒してしまう’とやりかえした突端にこどもたちは、パッとスクラムをくみ、これで絶対倒れないから“本当のとしを教えてください”と18才〜25才をいきつもどりつの詰問。

そこでこの危機を脱するためには、「星の王子さま」を使うことと腹にきめて‘あなたたちと私が、こんなに親しくなれたのはなぜ?もっと仲好になるのに大切なことは、“とし”がわかることかしら’こどもたちハッと困った顔をする‘それは心と心の絆でしょう’<sup>もろ</sup>聡明なこども“人にとしをきくのは、スネバ Polie (失礼なこと)”かげの小さな声(今日のAkikoのフランス語はともによくわかる)。

しばらくして、スクラムはとけた。

以上が20年前のベルギーのこどもを通してみた、ヨーロッパの日本観であった。(都留文科大)